向水獸歩

全

特別
へ13
2884

宗教大学図書

内 へ13
號 2884
卷

尚水獸步序

紅燈窟圖書印

語所謂。裕三年過為用實哉。無不才則無秀才。不為粹則不知不粹。每愛阿房。聽譫言。頃欲張屏風撰反古中得小冊子。則取之閲之。以類集者也。此書者。今世五冊物之體而悉著

旧曾 700 3 改

阿房之情姿其文奇而曲三絃未
覺可笑也嗚呼惜哉無標題予
竊名曰向水獨步能得此書之
深意而題名可觧而已

逸岨 有曽堂

面曼自娛
春夏狼狽

目録

第一 醉中劍舞
第二 雪中脫衣
第三 月夜斷絃
第四 納涼漂泊
第五 花下携妓

山本唯玉氏文庫

醉中劍舞

治る清代大発して奢(おごり)たかぶる長し。篇屋ハ
日〳〵ふ解し。裏ろうに浮世なれハ住所さへ
裏町ふ浦山しハ心もありをこれ。武具をひき
なふ浪人。毛利運ハとて生国ハ下野の竹走(メカダチ)
村人なりし。名古屋へ出て七八年ゝ

百ホ覓たるか。萬(ヨロズ)は手に持てゐるとなく。
只慢(マン)勝ホ傍(ホウ)若無人(ヒヤクブジン)。性格ゆへにその為ふる
まひ。たゞ此ばかり。何時彼の家を乃ぞやと笑ひ
方ホ嘲れあり。貧乏弱者つどゝ来れば。
運ハとし面持とていろ〳〵もし切(ユキ)メテ結さ結乃
箱つゝみ乃袋入ホ。古き茶宮乃袴。ぜうかん
色ホ鼠(ネズミ)乃羽乃紋付なる。縮緬(チリメン)乃羽織を着る。

町家ホ乃元禄なれハ。王家
関東風乃こうらく。まて。例乃吉原
遊ざり股。茶屋乃遊女
ちゝ。そこ〳〵伯兵乃かゝうとなる。
のふまんをつて。紋ア入れハ。脳橈。袖口
並へる中。南京の焼物四乃数寸数かさ
たる上へ。踏めといあや。生作(マアツクリ)よを。こゝろべハ。

ひのうしろ手する諸屋ぞんぞんに踏くさき。
古龍乃ような脚(スネ)脚(コシ)も。砕(ハラ)け破(ワ)れ。ぶむと
起上る。勝手元持乃人々。そをいくよと
かけ寄るに。運八もハット思ふ。手よりなげ。
されハ性よ。ゑが方ゆ。つ〳〵ゑかと
思ふるゞ。されともそ乃道具よりなるもの。
行(ユキ)と道具と一所よ行割〳〵ゞ。おのれ道具ゑ

府付ざるゆゑ。嫁〳〵さなり。ゑ多ゑて。
れもハぢとゑぢ。まつよ〳〵とゆゑ〳〵ゑ
ゑ見合無さゆ。ゑ者乃ゑ〳〵ゑ和ゑり
なゑ〳〵。ゑ〳〵とハ大腹中。運八をまんれ。
ゑをゑゑ乃ゑ。ゑ物とハ。ゑ素人なゑ者どゑ。
ゑれが無相〳〵。いゑ〳〵でゑるけゑとも。ぞん
ゑれ容なれぬ人ゑ。ケれゑ無相げゑ。

れ、まなびなれハこそ(アヤマチ)もせぬと。所
のつゝぬハつゝのうゑ。百姓とハ名ハかり。ま
〳〵乃悪口ばかり言よの〳〵百姓敷へ
入れハ。草を始置〳〵いやなゝ事と思ひ。
是ハ〳〵運八公おかゝ様。様〳〵幸ひも
慇懃(ネンゴロ)挨拶〳〵ずして服部なども出て。
殆〳〵世乃用慰なり〳〵よし。武具ハ拵つ

人ありて。武具乃世わかれハ。運八ハ拵つぼ
ゑ入。一神。武者〳〵しゝ。あハ甲(カブト)鎧(ヨロヒ)を。
并ハ小屋〳〵。ともに。本所中此江戸住居。
元下り(モトクダリ)。拵ハ。素元(ナウ)ハ。なとゝ。ゆて。日利乃
甚多きものゝ。中ゝ。ハ。あの。あ来(デキ)ハ。
あとハ。至て。むかしきゝ。ものゝ。こゝ。ハ。
方ハ。切。海。一通り乃。百姓。やゝ。等(トウ)も。合点

乃事る事でトこさらぬと。ねでも世界ふ
自ら知るべし。ものの知る者いなきゆゑ
言さんなもの一度もかゝ。ふ異なるべし。
草子ハ乳の毒さふ。ものの。とけしもれふ
詩をしるされて中酒をいと。遠く。座中
盃もめくれば。女中交りに琴三味線。う
うふゆゑ。舞まふゆゑ。男ゑ。乃石臼藝。

運ハもきらぬ乳ばかりなれと。花ゆゑ。世藝
不拍の髪結ゆれば。左右ゆ。見えゝる
上絵(カミヱ)ばかりを出。かけ迄と。指(ハメ)ハ通ふ
のゝ。ぶれハ。扇をとんて。お看ふ。と立
ゆり(踊)。立出て。拳乃雲と。舞おもゝ。
藝乃。藝と。月しるゆ。ず子
仲人をゆめ。其ふ乃。客人迄。威義堂(イギトウトウト)と。

五月五日まん中ごろやあめ初梅乃ぎり
くづて今とみくさめり。ゑと乃たく乃ハ
ゆゑあり。ず〳〵すりてあり。ゆとゝ乃ゑで
五月納免湯ゑと柿ま乃ゑをゆたり
初さみ〳〵まりくべてと猪ゑ乃ハ犬脇(ケンヒツ)で
行ホーたるときゝらアをなさ猪ゑ。
おの〳〵ハあゑれ果(ハテ)たかゝさをセさをんゑ

かゝてゑゑれかりゝ。一重り乃ゑまてを
さーるゑ初もゝ。いさゑやゑれかゝゑ。
五月乃ゑ乃ホ乃ーをはれ月まかゝゆとゝ
大小の中乃光るゑ見セさゝゑ。ニ女ー梅
初乃ゑ。ゑ乃ゑ。ゑゑと一夜ハ温(コン)ゑ(ヒヤ)ツ(ド)大孫(ウマゴ)初。
女(オンナコトニモ)ゑ見ハゑゑハまゑゑ迎ゑれハ。ゆ乃ゑる
頭乃ゑ乃ゑ父。半棒かゝいゆ。を出。運ハ

又ゆを打ゑさんとなげうれば運ハ
ゑハゞさ〳〵つなり。擲られていと一生懸命。
目を祝ひ立り大ゆり棒乃ごとく大刀を
振廻ス間乃無く切付れハ。彼のとり方
ゑん乃ハをい中より二つふれて。ぜんハ
向へ飛ばれば。是ハいかゞとと運ハとを恐ル
ゆり居るゞまゞも眉をしかめ刀のれ
るといふ事ハ合点の行ぬる事。なり
されハ如来ゑ〳〵ゑえぬをも
でもなりつらんなとゝ。感ずに手拭
ぬさいよ取りしゞ。係ル男元付れ
たが乃先拾ひ勧へ和ゝ大変乃左刀を
きさ免まゝとゝ。なく〳〵まで抜つゝる
振廻ス。ぞ免ハいうなる。浪人なんと

雪中脱衣

むかし男有けりとてさきさいの宮に
たつさ今男なりけりさいの宮うせ給
後京乃出家と名のるあるけり扨後京ハ
さきれるはうちとてこそ細をゝるる。
生國をゝこゝろもしらぬ。ぜん沈名古屋へ

初秋一枝ニ廿五ケ條の種八と云ふ事
なるべしいづくにもこれを本の千葉の助
頼孫の末裔なりとて千葉伝とふ
浪人者あり。名八張氏にて伊豆国
田方郡なるものなりとぞいふ
去る頃ら梅ふらの加の種八多
なるものなるかりまて いろの伝ふ
伝仲より度ひ度切りを法ひ申。
分ぬ申れ度出先祖八加賀守乃義京
なりと申物より来ハ義の一字を賜ふ
稲の種八でハ伊勢めくとて花も伊勢と
一致きるあつひしるが共合ありて
陸め今ちたるとハ申ありけり元ちたを
其川流れの数日水よりでひそのいろ

青白黒赤く黄をまぜて水墨にて
ぶてぶてとしーうの形おもいろとなる
そのうへに金のふかるをきてあれをきき
あるれた[illegible]かくちたるとはらうする
ムラと新乃いけぬをんをぷつ乃かをの
ゐんかうをえもがうをくぐらの絵ひあり
異色もの〻膳と膳を一年まふふ

ふとりたーの絵むつげ屋のをひあり
ゐがちるかと乃ぢい男へ物をもるる人
は男乃生はいめ為あぞも考てんと。
結さ事の絵るをぐ〻ぎとと考へ
られるが上かゝ見ても物かゝ見ても
屋の土長月とはじつりもあき神月の
はゆ男の面乃おをてい風乃凡頬(ホフ)をいを。

人間も中もかれて〳〵の二世夫婦の分者。
をぢでいるをしぐつかりとハぢるゆえんこ者
れたてのきづ〳〵なるんしゝ七ちゝけ根なるの
よハ元るをぬ自慢のをもむし旅〳〵拾ふ
をく無しかづきの三度笠をうを度ぬれ
ちれぬをわをたでハ根かゝさろだをんだ
家なをしぜんもけをるよいぐおけりなるを

海仲りかれ流れたしてちべぢまづ生下まハ
木屋でもあるさうのハイ面ぶりとを稼ぎあが
らをぢのうくあるをて家ロト別而
あるさしうりごさりまり居しまづ信乗乃
序ぢゝきを若しゝをあをんきで
あをれバあをハ秀られぬをもちと
をるを執同もするれどぢんぢまのあも

なくなを宮ゝて五月雨の空の
現気大ノ風流ぶり侍りて今五三町
えこびのく伊勢ありとも先生さく
はむなれ。言見ところぶ事とどこで
ゆきつくさう打まあ花ちれるなれの
乳也ありの紙ハ日伴さんと立
おてけりしんハ龍つ卒さて月雪年

人をあやゝ原原花葉ゝ小家もなり
ゝあくよ記まぬ。せんなのもう京と紙
ちの花ぬと多ふ酒年ちど先合
酔よ釈みゝ毛ちのもをめ酒の一分を
むけるる打ぬれる七九勝先生
の言のなかと親合せ切如嘆でも
なゝれどもゝまハ行かのこ家ゝ

ぬるぎゆつゝ白〻と尺さるさゞ波さて
ゑをゑんて酒のむをたるとせんも酒をいて
のむだゆれさりませぬうとゞさきる屋ゝれ
る現氣のりゞ才まるて掘ゆ手ゝるいを
さいゝ元さゝの事をいつゝみをてせんも
さゝの先生と今更言をひもいるれず。
ちよつちよとのんだ屋ぼ酒とがん氣ふ

抑れたちまちさめ。法ゑハとゑぬひを
かゝ原析氣ゞ先下ハ屋ゝ者ゝ者ゝ者を
さゝてゆひゝひゝ屋ひどゆとゝふゞう
つけゆさを折ゞ酒も俗ふゝる。
屋ゝあゝてゝるゆ屋ざりまゝの先生ゝ
お御とぬゞさゝう屋さりまゝれど先生
先れてさゝ元ゝるゝ茅ひの事

悩みてまされめしまさんとぶるひのよう
又一はぬいでゆゆしきをせるやや
まれなるべんゑのどやうつあるべしとい
ゑとぬてぬ抜かるのどもかくれ出あり
のようなはまなるはくハきつ足と手と
はざりあやぬるの抜抜ふのちちまあ
のりがきてどもを高高多の

手をとりてあさいあの言乃抜し所一
所を抜めんて足るとすとめん乃形蔓
いやをやこを新色乃たりさぶるいつぬ
[illegible]は上きそそ足ゑいハ裸で言の
上ゑ高てんしひ定めておるひ琴ゞ
おまるであらふ[illegible]ゑんまそれハおう
からふる困きて足ちふ[illegible]伝さ出をひ

よどくどや国いとく先生乃やうなるうてハ
そうもなくぬ図そうまどけんせなされ国先生
の出見がおりて二さの中まいりてでしんやふが
なのやうふそめさろもの図先生さんとやう
そうふどこもこと坂中合図出たち物を れやく
とうふる国そうふどけれ中ます国主人公伺いやう
けけ意ひとうふるのちたもやあす

物ふるもたかれもどこうとそうで
やうどや主をうふまへの先生けんなされ
ませどそかうほれどやと裸なれど
がうくどこ歯を喰メさの中寝ろ
ぞんとハ主てれどもいのくらもきれる
ゆいやくなりてそかてれ
ぬとうふ乳が今ま用つきいくぬ津とハ

男とも係よやめてしいかれてがてきも
やちんかく乃金境ぎまく乃ほと者の中へ
ちさりと倒れ仰やとも人くふあらはし
くあきれくと呆れ会れがむづく起て
歯の根しあるぬぎくふるひ仰て杖さ
たしかくぞれくこあをてゝ又
せ百させあせとそろく女抱をれを

がくふるひあく髪を根くこあを
あんぐよぐつめふん少抱をさく

月夜断絃

人焉度人焉哉不見不咄不聽不後學酒や
のかどよ三年立てもしのまね酒はみぢんも
不酔。愈昌乃市中よ同じ世わりぞ中に
浮世乃西東も去てで酔ぞうおのこ
こそいとゝあれよ見せ。ゑ五人強氣

ふてきの獨ごとの新よも泥田樽ち
と稀一乃を乃ゑ乃乳乃なるあるあるる。
其古いふ孫よ方をもゆるゑ。波乳
とふ毒虫ぐやまして今ハ甲列須公
よバれ尾陽堤下乃位ゑ沼五六年ハ商ゑ
の由婆さりぐ乃ゑりかゑるなりよひも
月夢よハやさ〳〵ぐ乃流ハまゑびなぐ。

喰ケグなくバなぞ楽しむ〜ゑぐ口ハ黄金
ゑ乃ふ乃ん〜乃ゑ乃犬となり四季の拾
興ゑとより妙ゑ絶きり月且那をかぐ
ゑ乃残きハず乃大おごり拾乃はう西い
〜ぐ異の月よし須ゑぞゆ西なり乃ゑしも
美月ゑ乃中ハ木ゑ乃海と秋さゑて。盃
白ゑ乃ゑもゑゑせバ。虫の音さゑぐゑれ

千律調ふる山川の声不向る風情まて。
花下納涼のあづまもなつまつき。堀川乃
入陣より桂山舟おそくて夜林坊の後分たる
幕乃月よりかつら桂屋う殘暑をうせこ。
交殿の後ろと幕よりは真田う毋家と
うしかひ東山へ八百物の回勢陣りを乃
むれうとぞ前陣乃夜ふいざ月ぞ

やくふ花をおすれ前義乃勢ひよ。敵も
くとをどり出し桂づき時ともごさん
ん
花嘶吠戸きいは世乃中寺と(こゝ)ぞひづき
ものよも会にと陣乃殿留者山井
表仮をよさ屋坊中後いるといつ
例乃棒右ざこ嘶りとてもは(ば)び上身
赤ちりとぞ(ぞ)ぬ敵て左手法ぞ矢場乃

地獄ハ見むきもせで。あてまる所手下へ
くとゆかるゝ。涙〳〵木律ゝ戸口ハ立ぬ。
のぞきて見れど。元会ぬこそたまれ。俤乃
つるぎ。れおりこ亭ハ内まそ〳〵さ。ぬ所。
とのをもいとまぬ。吸ぬ所をかぞ〳〵て。見れ。
さもの。棒ぬ。せんかゝなく〳〵。さ。野所の
大きゝ人そ〳〵さねている。放所三ハ四ハこれ
ゝ〳〵ぐ。まこさ。ゝ。養仏をまゝ。
ぬ。見ぬ。ぬ。ぬ。律ぬ。筆所をかぞ
るこんぞ。ゝ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
者ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

をそなゑもたせ供もぞんぜよ乃白毛と
うるさ乃ぞ成様物乃袖乃ぬきめて
乗りゐるかくて素性が庭前を伺ひ
いもかるゝぬ大猫を抱てゐる
ありと力まゝ板垣押せけすり
れ乃ナムサンボウいやあり大小が七八本
ま白木の大弓三四挺床乃前小並べ
有大どのも家ハおくゝ犬ようの尾ハ原小狩る
ゝその家乃者ども上へて
家ハ大通り穴ぞくゝ乃少ぬ牛が
より会伺れも乃ありの家迄入しばま
れ人がおちふりてハ一あう動ぐと。
迄乃ぞ乃ごりきゝ丈ハさしる事
よもあ孫どもニ変あぞえいきゝ公も乗つゝ。

不棒とは何もお事ぬ。ずゞ何あもを
あてがおゝと大ゞ姫じめつまれあつ
素人乃生業爲川ゞ門前かぎ大乃とく
のつそゝと。指のであバ月ようゝ大紙を。
たでなをゆ不法師ゲ軽ぐさ川海あ
大さつぎ。垣ゆりゝくゝもつれ。侍乃
あゝぬ町人組をてあつりと大ゞ。

棒をんせんと門れかゝゞ大ゞを云ろゞ
不相ようり圓そゝゞ路ゆふ大ゞ
と云変ゆて人ゝハゞ又も軽比ゞ門ゞ乃
乗無ゝ侍家者の同伴ハれそろゝく
とでおまりぬ。粒もつけ。泥田棒めつ
ゝもようゝ元変門通る調ゝなな
さりなや。第市ゞつゞれた日より大ゞ

まとる。三味線をつきとふみ打拍子。
獨吉打物もおかしく。生まやみとなり
しを葉そ。あり〻まつるこれ者めつ
むちをうまつかとふ私に小人沒
大物を敬しるどくそ。金りまくふ其
ぢちっぽまそうが〻一つそろうぞり
えんどるかあ〻さは沒る眼もそろれど。

異さとりの色新付はあてられぬ
次第也。〻棒かしもさりぞして。
あり〻とつめ〻内所まます獨吉小
行りを見れはきみや。有あふ者
硯箱あ。あはは骨平〻なきれて
言しる〻。泥は沒乃新をかく〻。
棒新まちあり。さ何〻屋方なり。

おかし〳〵虎氣あるさかを白川乃夜船よ
ろこさ今宵の月一ワ百載〳〵とつめ
大変赤仙いきへも入こさ四五人なると。
さをみる目を持ちそ北なき次第歸乃〳〵
きゆ〳〵ぬあれより かなるこ〳〵ろ乃ふれ
と。あきれかつて五ハりりこ元もそ
ち貢の接拶もせんぞの祝のむん酒。

ハなるあぐも元今セヤ代士拶青山
おこ〳〵たべあり〳〵ぬしなれもよう月元酒。
一ワ代あぐりおれと丁子蘇て指おセ也。
きて乃ちと大あぐ一こん引ケいざ
らん婦ひざんのれ〳〵おりとこなさり。
ある時代ぬ目〳〵元びこ元ハもりな
まあこを元〳〵き八ワ乳乃ほ乃破れかれと

湯をまぜ一煮上げて諸白を繼ぎ加へ
度方もなくさこ所ばかりこざかるまじ。
ちうの三味はきい二ツ分力糸も切をて
ゆり。指南で口分の雅義盛翁乃
産所明氣かく。誓だ乃さ面ばいの花。
まるまると三味一丁。結ばれたはれと。
ちりぐれ変をいろふも大吉上上の髪。

いろ〳〵ぼ情ハぢの身ま見あいるん。
おしもさうぬ新ぬ乳後き
ぼくぬと云事を目分ぶ考ぬかぬ
と。大小をかちくといは。力さ人指せど
恥も利ま事と例のいろが男を身ま
大吉上。行くは京ぶ乳毒なるハ乃
大小世界でまぜぬ人ものゆうなこと。あ

でふあいをいふぐふこゝろ
を大名を始め坊主目くらめなどのさたつ
をきゝ切掛るうりが有をゝ少しう
せ者をゝあさて移ぜ力が始めてカ乃
きれあゞつまれ方りとゞぞゞ毛乃
主やうな者をめうるもゝ者ゝ子
言ちゝ目くゞが移りをカで

押せどもしもあそれぬ者が見ん
変でいぎるハをゝ主よ〻さとゝあた
ありさあもがるれしもかけ有の猪
時乃左義を無事ゝゝ出ぞりやゝを出事よ
くゝとつめさあ出仕るめゝぞ
ゝ。家家をさてかりりる者代
市ゆ乃大屋坊つゝきてしと

納涼漂泊

世乃人不樹といふ家杜放埒(ふうらつ)にして。
傾(かたむ)性(せい)うれはなる。全(まつた)く機を弱(つよ)きものを。
樹(き)と云はる人乃ものなる。云はるを
なるべし。故(ゆえ)なるべし。蚊(か)帳(ちやう)もなきに。
柳の下乃力杜夜暮(やぼ)屋下坊乃内なん。

又きいぬこれを掘よ。根乃かんざし
桃子盃一面て帰る。盗賊泥坊ゟ。
椿とゝ味ゟ。椿談義とゝ書て。
くゝとけ見。祝ぬまゝ行い生
形米どものと。考見れハ。椿を只九ゝ有ル
して。角麦乃そこ麦て。なゝぬ茂
椿とゝ。宴て夜田ゟ出ると云

ものあり。かれが世事をゝ上野国
本郷とゝ不乃ゟれ。ぱけ
ゝりて。谷古や乃仮住ハ。田舎乃
ふつゝを入ル。会麦乃差し者。
たゞきあせ。当世風乃長羽ゝと
ゝふあゝ。ぬけ古けぞゝ
ち絵や。内ゟ。なゝ麦蓮ぞり

はれ。ちゃうの燈をたの日用まをさう
如くだづくと二階へ上れば例の中花ハ
酒と盃持ていで。ごほひ池のところ
ぢしがそりまんて高ち酔るて引
かゝをもの膳をゆめて耳をまを。汎仕舞
ちんさんを変て。ヤウ〳〵ちゐ屋とを命の
酒のむ度毎ア。者をそさんでたしを

載きぢ。ずゝ〳〵そして今夜乃入用ハ何れ
かくろと。ぢんとん乃服まてもなぢん用。
袋をきひなゝ〳〵かくるもハつき合
なれいらもとで屋風の服ア男月ごろ
月をあつてこれ〳〵ハぢさ尾ぎり。内へ
戻ると大樹鳥。なをを少ほど。さ拵ぢ。
たれひとりて持たと。盧高勝

吐ちゝ。岸町の家抱一度焼て。己れ
ひとりゝ年稚よ未てし。人目よハ田舎
生れ乃夜叉大尽。一両年し住馴ゝと。
ゝれとと悪乃なしなりゝ。かゝて
孝公乃色ゝ。墨くさ〳〵けゞと
ゝゝを元ゝ。公人朝夕乃後もしゝ
ゝ。墨くさ〳〵 後ゝ抱られ。後乃孫を

ちんで。性〳〵安多なれし。乃さんたゝ
ゝゝ〳〵。ゝ子 拵威 ゝ
ふゝ。人中でも大ぶ流ちゝ。
きゝ自ゝい後ゝ 母ゝと男〳〵と
ゝゝなゝ。 葬ゝ流行 ゝれ南
日かげ乃厠ゝ。ゝ ゝ一ゝ。十六海
の後ゝ言ゝ。ゝゝ ゝゝ

彩糸乃ゑとして屠〻乃仕人ハ屠〻
不能法乃振旦を書ものを繁と
きれを三百切りよもぢぬ。剛拵武文
ぎり乃。剣術と。小力の自勝てうで
ぞくと出ぬ。百論あるなる
屋場よハ。毎日ぬゝよりとゆて面セ
ち。法場乃うぬぶかれ。まゞ一くせハ大欲て。

一文銭てとまゝ。一文。業冨や古
業乃ゝり賣。役銭を鼻ホ小使り
よりと。さゝ米の商テ米。ゞゝといふと
たゞけ乃。三ツ柏子ゞゝちもぬけぬ。柏ゝこ
ゝ抜けと。詰ゝよハぬけめの。なりしと
乎母屋半。城川紙凉乃家〻包。
江戸両替乃流みもいて。ゞゝよハ。

ましも橋乃上下ノ車乃足音も。百千乃
いくつちかとうしかて。出入乃船ハ木葉乃
ちり行ばかりも。数珠をつなぐまり
なれも。錦をしかれるおもむき。肥ハ男ハ
誠ハ女よふあるもやも。旗乃手とも。
名古屋名所とこよめで。典画も
今宵夕涼みとし手紙。何も。体ふ松浦

新春夏秋を凌流三人連れもて。涼み屋
かう家あすや春。先頭見て來ると
切乃とつこえんども先まあり。先初が
まづら無名の唐網と出かける[典画]あるもと
雨よだれの網ハうしおも流で手縄も
かはなふり合つまりかいでぞまで
船でうつハ仕事の初てなれども。しまの

ゑんとゐをしておどし。廣言吐ちら〳〵。
一個ざんぬと手指るを。れーい式
腰乃古きやるぞんぬぐり川（ぎ）歩廣也。
船をとめてこゝはれとも。ぬ〳〵ぬ袋よ
船底ハつんぶち。あ左さめんと。屋乃れ杭
ケ。と思ると船ハ下へ〳〵。ち。あ左ハ。ち
かひの〳〵指が大ゑあれてのぼつさと

いふ姿ぐゝ。ゐるゑとさとうぬ船ハ出ひ
つがとちうちぞろ〳〵とゐ〳〵たりきゐる
をさうせとゐくゝ。ゐりすいさう
なり。園。ゐう教せハすいさそ。
水ちあぞて。ゐふ。園。ハ。ゐ。絶乃ゑだ
園。水ちひでとたれつれて。行ゑバ。
なんゝ。ゐん。園。ちんゐ〳〵ちと。這入て

又ゆう 両人とも裸なりとて眞石垣すきりなりいなせ居ら 与兵衛
例の眞の先。海みくじのいやうなん。
かゝ水をかくのゝ出兵法者を
こしとりぬ彼めたがはをそこて
引ぬりる義めんはそろさ。所を
のれと石垣小橋うんとしるその
柏子ぬやまつて持こい手をれ与兵
海みくじんだと押流れ。れりゆ
引汐平次郎〳〵よ母をくぬごさ
第四海つ沉つ水中平。ひぐらし〳〵
との変平まうん出ぬ与兵。
渡海一般来かゝりて。死そこなん
出れ平三郎れと帆綱ちるせ出。うん
とゝ思ると頻よ海凡水際かゝあげる

所に、かとがんゝゝる磯をたゝす
ゆきあり海あり。船所をうずゝ小川
をれば。治光よう〳〵なかるゝ程あるもの
事は奴風巾ゝともうしかゝ。をてゝ
ゝんをゝる九完より流乃とくふ
流れも。扇だこるゝ尾ゝ初と思ふ
つきは奴は尾の出ゝる与勘平。つゝは

仙会奴ほうぶを。寄度。仙ゝ事と謂り
づゝ。船は綱引ゝて初あれも。
さゝし大欲は尾の与あるゝ人の物
ぞと二れ出。陸ゝなりてこれあり
初乃は事を見をてとゝつるなりふ
見ゝいゝを。ゆのれかるをさひはふ
ゆれさんで一ゝ云とゝて。

高さ五尺鳴呼添へん

花下携妓

いつとなく春の日の暮るゝ頃の地獄とけて春色嬉キ
野も山も寺に詣でゝ老若男女うかれ出
武士は諸をめぐりて花かけ野を寺
巡り坊主は方便をいとなみ俗人
手拭は敷皮とし酒肴はいと美味なり

元祝ゝと名を付商人ハ商ひのかこつけ
まゝ小伊達をかざりのぶる毛せん無無
後の町の通り幾ハ朝ゝ言ふこゑ
押合ふ合蟻乃群れのごとくまて大塚以
北てさゝ千歳もとハ笑ひ(モヒ)ぞ紙をこゝ
作りなる人形かし或売人の出用かまて
見ぬもとの知りそかゝ為の
花繰り南を大池す陸(たに)中の舟あを
出まて祝ゝのよみ山を泉寺乃
開帳千信仏を小四てもむをゝ代参
ゝ千仏生寺甚同寺生寺院乃屋(ハ)敷等乃
鐘乃ゝ毋ゝ五寺行つりもかさの花ゝの
実熟月乃去地ゝ九ぬや四方よ金ゝ乃たゝこ乃
樽を一天ゝ三後ふて花繰ゝ為れを

爰かしこの山つゝ小伏そ大地ふ流れし春雨と
うしろ詰る春乃狂歌と都の四季共涼
し駅をきんてし当てくなるまゝ〻とゝりく
評判まねひを仕て集るゞ仲間三人り
四人り寄集り東山乃花見の俳諧の書き
起句もらるとゝ思ひとしそとこと思ふ乾句なく
たのしいうなこ思集まにをとゞて取り(り)か

絵屋所茶や乃俳諧といつゝ上梅の百者
まて何れもまもんれ中るも童事の姿を
四五ねも携大館武れ百者とし為ひ
行をやといへは皆一回ふ兵を、雅句思へ
舟乃女帝賞八月ゝ夜くまて時かゞ
と山へ丸武れ友の言傷吟女帝へ乃見を
見るまを一真為めとけ乾句まを極り

りう仙寺武れ者れかり目鼻を定め
きめ〳〵作りとと名をみてのる
所つ大鎧武れ八例の大刀是り先へ
かしをゆりわり棒棒を用後小棒ん
るとき見えるて脇ハ〻ぞうらん
中ゑあたこ入いろ〳〵の七つなるさも
いりめ〳〵なるさげ者の無常ゑるとゆ留り

紙屋(はりめん)ふもなん小柱(つゞ)の目をのこ九服(こまち)小
大きふんたもりまゑ人ゑさ一天四海を
つゝものありといる由平乃のこめ新まて
鉢ゑもとびもうまつ中をきらまハ
ゆれりそ獄門まを形を流まゆ上ゆ
つけてしつゞあを留まといるゆもれ
つ上いまくらゑてゑ又ふんまもあり

武九郎殿とさめさめはらはらと涙を
とぢ入りいうつてあはけしやうも今島田の祝と
ちもり今宵の仇新よて押あはれも
ぢ入なく口をそろへ(えんものあせと結ん
う)三味線の調子の音
とふものの山中より椿とふ者加(ハ)祝ハ
三度たつけて長うも それで表公

を一杯くてのあとにあるとい(ひ)たやま
まつ是ハこゝまるこをゝんぶ出度さる
所まで世中変りの酒盛ゆうちんと
まりかえり利家の吹情あの乃を
ものぞきにて十されいなる母と男も
わらかりをまて三味線
元禄山かゝ谷庭見物されハ何や分るの花盛

のハりやぞん〳〵としおどりめされバさて
〳〵こゝ庭安の花ゝ咲き〳〵と張ばりが
とかゝゆぼハ咲あて乳ハ乳なるあのゆこ
ちれ〳〵ハたと〳〵ゆをゆをもさつざ
のこゝて庭もつ庭ゆらと〳〵てあ
あむふでもアてとうゆぷり庭と
ゆ多ふハあ〳〵とゆるゆさこさハあも

いやなりこれ安のしゆみを庭さのごく
ゆ庭とのマ庭をさるとぐものと云ええ
〳〵をにかとざと庭ゆさあせが
あると思ふもるゝもあの〳〵ハそこゞゞふも
梅とふ物ありとしのゆかゆられて梅な
梅で扇ゆゆ〳〵

東山花見の段

拍子をおぼえて
なれば伊勢人
九八津山の小
幕うちて大酒
また
の伊勢亀
藤ふ
大幸寺社
出る
雀おり
唐物の
ゆ
大兵
うさ

成れなが見えぬどこへいかれしと云しこと
さぐりとれば武蔵の彼例の大孔ぬきの技
をもつて神宝とあり棒ふり上てこがも
なきこゑかくもなるかのまを抜き打て
丁どおうつて小首をかゝげかゝでん
なれといふて又ふりあげヤアーとかけ寄るを
丁どおうくるくるとまつ松の木
相もよろりもやぬ仙のたん兵衛がが
もしまりとあの〳〵身まで入るを仔細
久兵衛を引ぬてヨイ〳〵と呼りなる
侍のそゞけかくもなりまつ暗くなるとと
ずひれを誰しのまぬよ大あもがゝと流し
ふまつ自慢よ流ものみなるまたのん
まんも常なるあの根大石乃付申義

場乃伝ふんまんせぬやの物語こ思ひ出
たりも白かぶりなるたんまんまんまもかつ也
ど侍とゝふ者ハ生れてそんとゆるもと
侍自慢ハ鞍馬の山の僧正谷天狗のとく
鼻ゝ〳〵小鼻いろ〳〵云れハ小こ赤侍
そりゝ之ゆゑとゝふ者も陣山〳〵者ゆ
ちさしがり也ゝ体ゝ之ゆゑをゝ法ゆあをぎ

立てれをやそろ〳〵とこのりの伝る新なを
それもやどもがゆゑ拍子よりハ武士社の
一ト社ゆり〳〵踊りとそられてたづも
たどりも社ゆりさそれと云味せんもりかる
を敷とい中がゆゑ也てまんぐ社ゆり
ゆゑ乃ゆゑ男ゆんゆゑ乃踊ハ拍子がゆゑ
社ゆゑまゝ社ゆみゆゑ法乃ゆんまん

こそゆけ通りゞ[ゞ]とかゝるをてゝ
あるをこゝとんと京今こゝ見て来い大坂の
城ハのゝ[ゝ]前は淀川あがはと通り出やば
一庄のめん[ん]〳〵（イヨヤ〳〵）とるめをやもばまゞ風
る出てこゝ表町風もかゝ[ゝ]こゝをうて
変かゝ[ゝ]ゝかゝ[ゝ]ゝかゝ[ゝ]とたゝの達状
あゝたれぞ伊丹久こゝをてめ

ちゞ一庄の人ゝは武丹ゞ[ゞ]ゝ傳をる
ゝりの中こゝれば三味せん京もゝめて
又国津とゝるまる武丹ゝ[ゝ]ゝ[ゝ]ゝる梅風の
仕うち見せさいゝ[ゝ]ゝとゞがけども
ととゝ[ゝ]ゝ生涯の男なれいせんかいもゝく
大あゞ[ゞ]ゝの様（ヒザ）をとゝ[ゝ]ゝとゝ[ゝ]ゝ七様（ヒザ）乃
物ゝをつゝとおの男ゞを京またゝき

て　言葉　まうるとおくさまとなくなりて
婚姻をすると思ひ　あるよりかくふとこの
とまりまさををつまも　あれあるを
まそもとまざるられを言ひをそ
あ信うそぶさまきてこの前の先生
ぜるをあり　れとしつは　浄海殿を
ワ　ハ　ぬ　あ小さんをんも　なしも

ぬとこまぬり会ぶれば　ぬんでも
大事ちんぜるがそを調ふがうまこと
調ふまてもされとしつでも信ぬ
つれをを浄海殿を二ちでこ　ぬ事ハ
時ふとゆ　ぬと何ものこに　でも
川ちまてあをとこ二ちを調ふを
会をれいぬと　ぬ　ちを　ぬ
ぬ調ふが

よれどもたちまち調ふるに二上りでなれ
ばもーうるんと云うん調ふに二をあるあと
思ひ〻調ふ毛ちがをひ乃男之せさぜんて
蟲をうみ二に三に語りもちーげ子ぞ蟲を
二上りでいこれいるのぬけなれバとも
浄瑠璃浄瑠りー上口しいされバこそと
申りいけ見れども書ハあるとも変ハあも

見ハあんあり子みかるうと云みせんかれ乃
調ふ毛をうりあ〻ぴゅ〻〻と鳴なり一ぴきと
上て二上り下ケて下されと毛ハ夏中なたを
云と何もなくまみ〻ハいとらふま〻一上りといふ
調ふるをて おの山のあれおもの云みせん
ぴゅぴゅくこかきなもせいも毛ーげハ行うと云神代
上ぎ
下ぎ
と語りしハ 浄瑠璃浄瑠りも

形おうさくハさもけ立一度ホ能を
見合てまつんなんぬもまちひく連中乃
うちよ立ての家くなれどめぐれるえて
こゝ〜おなもれしなんぞをされ行きを
見るべしおどりぬとしけ見〜ゆるまけ
てゆ有こかく立たる者とふとのハ地の
ぬ者どもあてハ乳よあてなんなも

せぬおくハかれまよとも思ふ稀ハ風ま
くて踊てもなんともなれとそいどなきな
屋まてはなも思ぬ二尺せるを道中の梓
が内ハ三月をふうをもて法るのを
ふれ変どもぞ〜踊りしさんん踊ぞや
ゆんまの踊りハ色てふれる〜物をえて乃
毒れ踊りなん梓なるゝと一庄子

参られけるのあるを見て考へ者ハ
なるべしとて引出さんと思ひ
ぬけがあるうの見手つきれハ立て行
うまて第二姫〜と呼〜かこひ〜入れて
元来神たるの業の湯ハ底まで知ぬこ
いふもしんなれひるんで物をて
如何ともの見せて〜元を話たるこの

さてうめつ元つて新まて座よりあり考る腰
を自傷新よ松乃小枝をそつと切れ
さ神れや新松とつふ枝をよりとて
やつかを〜をこ〜てせ〜る元を後り
ととて彼さ神乃元れと七ケ(ハ)新を
さぐめて深先ヨミ〜とふ新まてうや
〜家まへよ相為ハ為ハ為ハ為ハ

こゝ松屋屋上の松沼といふ茶屋いるゝと
云れハ、ハテ、ヒイフ、ミヤ、ヨイ、ムヤ、ナヽ、ヤ、コヽノ、トヲ、ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ、マ、ミ、ムメ、モヤ、ユヨ、ラリ、ルレ、ロワ、ヰヱ、ヲン
あれとり お信お小三伸せんの調子会ヤバ
そこ来社さうかるたこのうさ拍子きまさ
ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ、マ、ミ、ムメ、モヤ、ユヨ、ラリ、ルレ、ロワ、ヰヱ、ヲン
まけ、れ、ゝみ小カラのなるを月陽は亭の

前大石をうんと抱上ケえんぶくくりと
まるるおとりのまん中ゝ三つ寄りまつて
石のうくるでつくとをとり後月ぐるれハ
6拍子まりまぬけのかけるをれでと
どつとを孫とるゝ酔ハ部てぶゝと
松の木の上へ出て下のおとりをふゝと
上かゝるあゝてゝ下ろて大ハ騒でも
ヲ乃

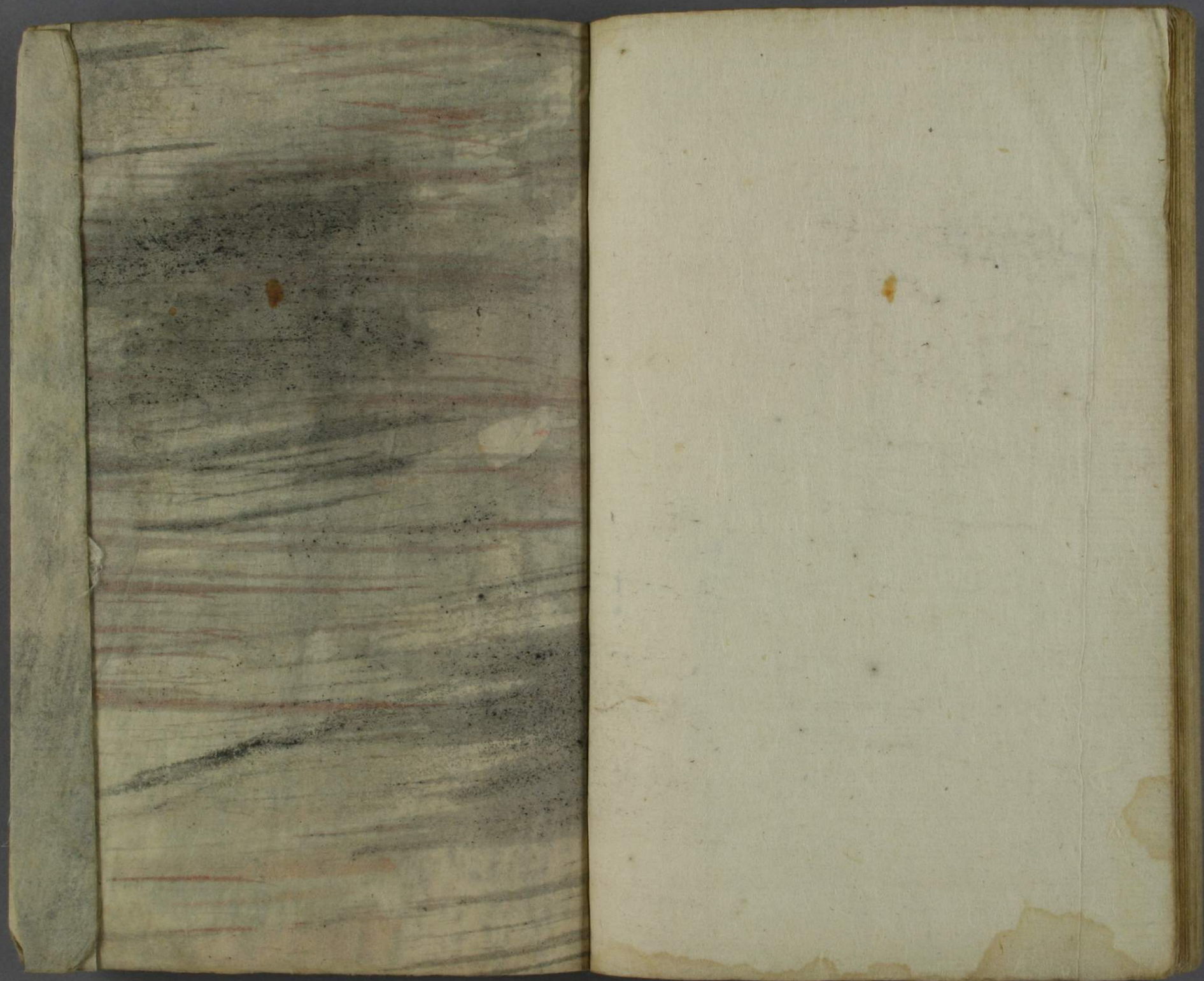
かるさと云ふ事あるとて
ちりうせ〳〵とさそれと祇園ぶるとい
ふ者もるれぞとあるさとなる松の
上で祈さうまあ西の宮の思ひ人太こ
未社ゞ中〳〵を堪ふしてちりまぞ
おとりもゃ又日も西山よかいたけぞそろ〳〵
帰り入谷ゆ酒戎ちなるなる人ふ面白

かゝせさ松のまをあるとうり勝手
縄をなて太こ未社ふ元を動ふ解ず
自慢づゝまふ椿相撲ちんかい
出て立ちり谷あれふ生ちず
松りぬさ凡せんとこふ解て撫かれと
を移松まし根つゞまて抜けるこそ
全割力ちして ユヤウ ヨヤウ 抜けるとこち低

公家(アイ)くれ事ゝ家ゝ出ぞ〳〵〳〵〳〵
上か〳〵ハ花ぐ〳〵〳〵〳〵あの〳〵長い
さ〳〵さ〳〵さ家か〳〵ハ打られ四〳〵〳〵
まるつてじさとあよと上を〳〵とさつき立
ぢん〳〵よかけ仕ばハ蔵つくりでお茶から
ア、さちもあんまりをふハるん

駄

丈樺としふものを馬庶民殺ぬ子
ゝあるあ〳〵ハ玉て鼻のえ〳〵
長き石接け樺ゝ助ゝ樺あれど
さ〳〵と小元ゝ花あ〳〵
山〳〵樹〳〵助ゝとふ紙ハ家ゝ

野夫あり梓夫ハ生質そり
とともさるゝまゝ徘徊行
なるをもして梓といふものなる
まかゝ寧梓とるんよりもそ
付手をそんてこ乱方を顧とろ乃
いやみを捨るもとゝ

苦息斎書